2	7	0	0	4

令和７年度　自己評価及び学校関係者評価書【年度末評価】

令和８年３月１７日

札幌市立山の手小学校

１　本年度の重点目標

～豊かさを　もとめるために～

しなやかに考える子　しなやかに行動する子

２　重点目標の具現化

① 【学　ぶ　力】　「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」を身に付け、「挑戦する意欲」を育てる。
② 【豊かな心】　「自分のよさ」に気付き、周りの人々への「思いやりの心」「感謝の心」を育てる。
③ 【健やかな体】　体を動かすことの楽しさを感じ、様々な運動に取り組む子どもを育てる。
食や命の大切さに気付く子どもを育てる。
④ 【信頼される学校の創造】

３　自己評価及び自己評価結果に対する学校関係者評価

① 【学ぶ力】「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」を身に付け、「挑戦する意欲」を育てる。

評価項目	自己評価		学校関係者評価	
	達成状況	改善の方法	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学校は、子どもたちが「自ら学ぶ方法」や「人と学び合う方法」を身に付けられるようにしている。	A	「課題探究的な学習」を取り入れた授業づくりを行ってきた。子どもの自ら発信していく力をより伸ばしていく。 現地学習やゲストティーチャーなど「本物の経験」を大切にした。	A	A
学校は、子どもたちの学習ルールや学習習慣が定着するように務めている。	A	全校共通の学習ルール（筆箱の中身、話の聞き方「聴く」、）の掲示を継続してきた。 校内の「G-up 掲示板」と「さっぽろっ子『学び』のススメ」の周知で学校と家庭とで学びを支える関りをした。	A	A
学校は、一人一台端末を学習で活用し、個別最適な学びや協働的な学びを行っている。	A	学びの質を高めるための、より効果的な活用を工夫した。（課題探究的な学習や自治的な活動の中で必要感のある活用を心掛けた。）	A	A
学校は、専科指導や学年専科を推進し、指導体制を充実させている。	A	外国語、書写、音楽などの専科指導、学年専科を工夫して行うことで学びの質を高め、職員間の児童理解にも繋がっていた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	本物の経験についての説明がとても響いた。授業での経験がその後の人生につながることが視野に入っていること。与えて終わりではないことが考えられていることがよく分かった。 子どもたちが「しなさい」と言われて学ぶのではなく、「したい」と思って学べる意欲が育つようになるとよい。 児童会館でも遊ぶ前に宿題を終わらせる姿が多く見られる。また、図鑑で調べ物をするなど、時間や場所を効果的に活用している。 山小では相手に伝わる表現を意識した指導をしていると聞き、これからの学びや社会で求められるスキルを育んでいると思った。			

② 【豊かな心】　「自分のよさ」に気付き、周りの人々への「思いやりの心」「感謝の心」を育てる。

評価項目	自己評価		学校関係者評価	
	達成状況	改善の方法	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学校は、道徳科や特別活動を通して「命を大切にする」取組を行っている。	A	道徳や特別活動のほかにも、自治的な活動の場を増やし、児童の自己肯定感や自己有用感を高める取組を積極的に行う。全校で「命を大切にする」取組を行ってきた。「まほうのことば」を合言葉に保護者と連携しながら子どもが自尊感情をもてるような関りを大切にしてきた。	A	A

学校は、いじめ防止基本方針に基づいた未然防止と早期発見、適切な初期対応に努めている。	A	毎月、いじめ防止対策委員会を開催し、組織でいじめ防止等の取組を行い、情報を共有して未然防止・早期発見・対処に努めてきた。 スクールカウンセラーや SSW 等専門家を有効に活用しながら、家庭とも連携し対応した。	A	A
学校は、子どもが周りの人々への思いやりや感謝の心を育む取組を行っている。	A	全校で「3つのあ（あいさつ、あんぜん、ありがとう）」の取組を継続し、感謝の気持ちや他者を思いやる心を育んできた。児童会活動を活用し、より子どもたちの主体的な取組としてきた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	常日頃関心をもっているが、加害者側のフォロー。さほど意識なく加担していることが多いので、加担した子たちの教育が大切。 高学年でもあいさつがしっかりできているが、自分の気持ちを友達に伝えることは全体的に苦手としていると感じる。思いやりの心も育っているので、伝える大切さを広めたい。 いじめは家庭との連携が大切。子ども同士嫌なことは嫌と言えるようになるには難しいことだと思う。 アプリの活用など、小さな異変を見逃さない先生方の姿勢に感心した。			

③ 【健やかな体】体を動かすことの楽しさを感じ、様々な運動に取り組む子ども。食や命の大切さに気付く子どもを育てる。

評価項目	自己評価		学校関係者評価	
	達成状況	改善の方法	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学校は、体育科学習の充実と日常的に体を使うことのできる場を充実させている。	B	学校アンケートでは、保護者・教職員からの児童の運動への意識があまり高くない課題がある。これまで、グラウンドが使用できず、活動制限があるが、「仲間・時間・空間（三間）」の創出やカリキュラムの再構成を行うなど、運動機会の充実を図ってきた。来年度は「三間」をより意識した視点で取り組んでいく。	A	A
学校は、食に関する指導や性に関する指導を行い、命や体を大切にする子どもを育てている。	A	養護教諭、栄養教諭と連携しながら、各学級での健康教育や食育放送などを充実させてきた。来年度は、外部講師の活用など、家庭や地域とも連携できる取組を工夫していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	絵本で食育をするという考え方もある。 運動機会の増加（選択の自由含め）日光は浴びるべきなので、期待です。 運動するための空間は需要な点だと感じる。グラウンドをたくさん活用してもらいたい。 グラウンドが使えるようになったら楽しく体を動かせるような環境を整えるということを聞き、楽しみ。			

④ 【信頼される学校の創造】

評価項目	自己評価		学校関係者評価	
	達成状況	改善の方法	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学校は、札幌や山の手の特色や人とのつながりを活用した教育を行っている。	A	各学年とも、地域を教材化したり、保護者や地域の人々とのとつながりを活用したりしながら学習を進めることができた。これまでの取組を基に総合学習を見直したり、学校と地域の連携を見直したりしていく。	A	A
学校は、教育活動や子どもの様子をホームページ、参観懇談等で分かりやすく伝えている。	B	山の手の教育活動や子どもの様子について、より分かりやすく、タイムリーな情報をHPで提供してきた。 懇談会や個人懇談など担任と保護者、また保護者同士が繋がる場を工夫していく。	A	A
学校は、子ども一人一人の教育的ニーズに応じた指導内容を工夫し、安心できる学校づくりに努めている。	A	学びの支援部を中心に子どもの状態や教育的ニーズに応じた学びの場を工夫してきた。また、教職員間で情報発信、情報共有ができている。担任だけでなく多くの職員が支援にあたることができたので、子どもの声をしっかりと「聴く」ことを大切にし、個に応じた支援に努めていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	情報発信について、さまざま変化してきていることを保護者に周知することは、学校単位の努力では大変だと考える。変わってきていることが否定になってしまわないような発信が大切。 地域とのつながりを大切にする心がこれからも守られていくことを願っている。 受動的な保護者への情報提供の課題はあるが、すぐーるの活用で対応できるものも多い。負担になりすぎない程度でできる対応をしていけば良い。			